

---

# 進藤家の人々

れおまる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
進藤家の人々

【Nコード】  
N0460Z

【作者名】  
れおまる

【あらすじ】

【山場とオチと意味】

・この小説に無いもの

## 1・巽の朝（前書き）

### 人物紹介

進藤紅音<sup>あかね</sup>：22歳O型。長女。ラーメン屋の店員。物事を細かく考  
えるのが苦手。

進藤蒼太<sup>そうた</sup>：21歳大2A型。長男。穏やかで几帳面。酒に弱い。

進藤巽<sup>たつみ</sup>：17歳高2B型。次男。一応本作品の主人公。上と下に挟  
まれ気苦労が絶えない。

進藤みどり：16歳高1AB型。次女。口数が少なく心配性。

進藤黄児<sup>こへい</sup>：10歳小4O型。三男。脳天気で考えるのが苦手。食べ  
ることが大好き。

進藤銀太郎<sup>ぎんたろう</sup>：48歳AB型。進藤家五人兄弟の父親にして柱。小説  
家で書斎に籠もっているの、出番はそれなり。

進藤輝子<sup>てるこ</sup>：46歳B型。進藤家五人兄弟の母親にしてもう一本の柱。  
お喋りするのが好き。

## 1・巽の朝

目を覚ますとまだ7時前だった。

そして、俺が起きた瞬間に目覚まし時計が喚きだしたので、手刀で黙らせる。

「ふっふっふっ・・・勝ったぞ！」

ずっと連敗し続けだったが、遂に白星を勝ち取ったんだ。  
間違いない、今日は必ず良いことがあるぞ！

朝っぱらから満面の笑顔で制服に着替えて自分の部屋を出た。

「うわっ?!」

階段を降りようとしたら何かに躓いてしまい、体勢を崩してしまっ  
た。

目の前には1階へと続く無情な道が広がっている。  
落ちたら無事では済まないと思い必死で体勢を立て直す、寝起き  
でまだ覚醒していない体は言う事を聞かなかった。

「うわ~~~~~~~~っっ!!」

そのまま階段を転がり、顔面から無事に着地した。  
いや、無事じゃなくて無様というべきか。

やっぱり俺の勘というのは頼りにならないなあ・・・

「ふあああ・・・お、巽。派手にやったな」

階段の上で足を投げ出して寝ていた姉ちゃんが、欠伸混じりに話して掛けてくる。

・・・あんたの仕業か、俺が躓いたのは。

「寝るなら布団で寝ろって言ってるだろ！」

「あつはつはつ、悪いね。疲れちゃって部屋に戻るの面倒でさあ」

悪怯れる様子も無く寝癖でぼさぼさになった髪をかきながら笑っている姉ちゃん。

あかね  
進藤紅音

5人兄弟の長女にして唯一の社会人だ。

とにかく大雑把で適当で、あと大雑把。

俺は大雑把という単語を見付けると心の中で姉ちゃんと呼ぶ。

基本的に5分以上難しい事を考えると頭がショートしてしまう、思案という言葉とは無縁の姉上である。

酷い目に遭わされたものの、よく見なかった俺も悪いのでそれ以上は何も言わなかった。

「朝から騒がしいわね巽」

「あ、おはよう母さん」

「今日は早いね。丁度ご飯出来たところだから食べなさい」

「うん」

ちょっとしたアクシデントはあったものの、出来たての食事は美味しいのでやっぱりついてる。

5つ並んだ椅子の真ん中に座って、両手を合わせた。俺の場所はいつもここだ。

湯気がたっているハムエッグをひとかけら口に入れたところで、姉ちゃんと兄貴が降りてくる。

「おはよう、兄貴」

「おう。どうした異、おでこに痣が出来てるぞ」

「ちよっとね・・・」

言葉を濁しつつ姉ちゃんを睨むと、原因を察したのか兄貴は呆れた様に笑った。

進藤<sup>そうた</sup>蒼太

5人兄弟の2番目で長男、今年で大学2年生になる。

それなりには喋るけどあまり口うるさくは無くて、几帳面で頼りになるのだ。

姉ちゃんですら頼りにするくらいなので、ある意味5人兄弟のトップといってもいい。

姉ちゃんは左端、兄貴はその隣に座る。5つある椅子のそれぞれの位置だ。

別に誰がどこだと決めた訳じゃなくて、小さな頃から我が家ではこれが当たり前だった。

「おはよう、みどり」

えっ、みどり？

兄貴の言葉に首を傾げながら右に振り向くと、既にみどりが座っていた。

「お前いつからいたんだ？」

「・・・ついさっき」

みどりは目線を動かさずに答える。

よく気付いたな、兄貴。いつからいたのかさっぱり気付かなかったのに・・・

進藤みどり

5人兄弟の4番目で次女、今年で高校に入学した。兄弟の中では一番無口で表情もあまり変わらない。特技は気配を消すこと、らしいが・・・

「腹へった~~~~!!」

みどりとは対照的に、あいつが朝から大きな声を上げながら階段を掛け降りてきた。

どすんどすと床を響かせ、空いていた最後の右端の椅子に座る。

「あかねえ、そうにい、たつにい、みどねえ、おはよう!!」

「ママが抜けてるわよ、黄児。元気がいいわね」

「そうだった!!おはよう母ちゃん!!」

進藤黄児

5人兄弟の5番目で3男、今年で小学4年生になる。元気いっぱいで一番うるさい、進藤家の太陽みたいな存在だ。食いしん坊でコロコロに太っている。

素直で純粹なので、家族で一番愛されているかもしれない。

だから、屈託の無さを持ったまま大きくなると姉ちゃんみたいにならないか心配だ・・・

「行つてきまーす」

「ご馳走様。じゃあ母さん、行つて来るね」

姉ちゃんと兄貴が早々と食事を済ませて家を出ていった。

俺とみどり、黄児とは違って出勤及び通学に時間がかかるから仕方

ないのだ。

「……………ついでる」

「おいしいよこれ！！みどねえちようだい！！」

口のまわりに食べかすをいっぱい付けて朝食を頬張っている黄児。みどりに世話を焼かれているにも関わらず、食べかけのハムエッグを奪った。

まったく食い意地の張った奴だな。自分のだけじゃなく、姉ちゃんのもで奪うなんて……

困った奴だが、黄児の旨そうに食べる顔を見ていると何だか癒されてしまう。

「やばい、もう時間だ」

「黄児……」

「まだ腹一杯になってないぞー！！」

「どんだけ食うんだよ。それくらいにしとけ」

時計は8時10分前を指している。もう行く時間だ。

どんぶりに3杯目のおかわりをよそおうとする黄児を、みどりと2人がかりで玄関まで運んだ。

「じゃあ行つて来る、母さん」

「気をつけてねー」

父さんは今日も書斎に籠もったままか。

ちゃんと仕事をしているって事だから、喜ぶべきだな。

普通のサラリーマンなら説教しなきゃならない反社会的な行為だけだ。



高校は隣駅にあり、歩いて通える距離だった。俺とみどりはそこに通っている。

「・・・・・・・・・・」

特に自分から話し掛けてこず、みどりはただ黙々と歩いていた。別に今朝に限った事ではなくていつもこんな感じだ。姉ちゃんや黄児並みに喋ったら明らかにおかしい。

もしそうなった暁には何かが憑依したとみて目の色を確認するべきだな。

歪んだ形で願いを叶えようとする、実体を持たない異形の存在の仕業に違いない・・・

「・・・・・・・・お兄ちゃん」

「なっ、なんだ?!」

軽い妄想に耽っていたところを呼び掛けられ、不審な声を出してしまふ。

「危ない・・・・・・・・」

みどりの言葉の直後、俺の体に凄まじい衝撃が襲い掛かった。すぐ傍にあった壁に激突してしまう。

「ぐほおおお!!」

「いたいた、探したよみどり。はいこれ」

「・・・・・・・・後でいって言ったのに」

俺を跳ねた真っ赤な車から出てきたのは、クソ野郎ことお姉様だっ

たのです。

で、あろう事が相手を無視してDVDをみどりに渡しています。

「じゃあね、みどり」

「遅刻しないでね・・・」

「おい待て！！せめてごめんくらい言えや！！」

「ん？あ、いたの巽。さつさと学校行きなさい。学生の内から遅刻してるんじゃないわよ」

「轢き逃げして悪怯れないなら社会人どころか人間として失格だろうが！！」

しかし姉ちゃんは無視して走り去ってしまった。

「お兄ちゃんは強いね、車にひかれても痣だけで済むから」

「・・・ま、慣れてるからな」

慣れたくはないけれど、実はこういう目に遭うのは初めてじゃない。今年だけでももう5回目だな。いずれもあの素晴らしいお姉様が加害者だ。

まったく悪気が無いのがもう、物凄い腹立つ。いくら姉であっても許せないね。

おかげで体が鍛えられてるけど、絶対に感謝なんかしないからな。

「あ、学校・・・」

校舎が見えてきた。

なんだ、結局今朝も代わり映えがしなかったじゃないか。

こんな感じで、俺の1日が始まるのだ。

くく 続くくく

## 2・みどりの好きな物

基本的に妹のみどりは少食である。

うちの兄弟はわりとよく食べる方で、特に黄児は大好きなカレーは4杯おかわりしないと食べた気がしないと云っている。

だが成長期であるにも関わらず、みどりはあまり食べない。

母さんに、黄児と胃袋を交換すればお互いに丁度いい体型になれる、と言われる程だった。

おいしいとも不味いともあまり言わないので、兄貴である俺から見ると食事にあまり拘りが無い様に思える。

「あつ、あれはなんだ?!」

「なんだよ?」

「スキあり!貰ったぜ巽、怪盗ルパン参上!」

「おいこら!!返せ!!」

晩飯時、またしてもお馬鹿な姉上様に奪われてしまう。

それだけでも頭にくるのに、自分の好きな衣サクサクのメンチカツとあれば怒りも激しく湧いてくるというものだ。

まだ黄児であれば怒ったりはしないが、もう働いて何年も経つ大人のやる事かと思うと、悲しくて情けなくなるよ僕は。

「ぬほほほ、勝利のメンチカツじゃー」

「やめろ!!ソースを浸すな、衣が柔らかくなるだろ!今すぐメンチカツに謝れ!」

お前をソース漬けにしてやろうか、そこの進藤紅音め!!

俺とお前は分かり会えない。揚げ物は衣こそ命、それを自らふにやふにやにするとは信じられないぞ！

「人の食い物を取るなこの野蛮人！」

「ねえ蒼太、あんた彼女出来たの？今のうちに遊んどかないと後悔するよ」

「俺を無視すんな！この野郎、こうしてやる！」

お返しにコロッケを奪おうとしたら、箸を落とされてしまった。

「甘いな、坊や。出なおしてこいや、おう？」

今日も騒がしい姉ちゃんと俺をよそに、みどりは黙々と箸を動かしていた。

隣の黄児に食い物を取られても、淡々と「行儀悪いよ」と注意するだけで、全く怒る様子は無い。

黄児であつてももしメンチカツを奪うなら、俺は本気で怒ってしまうと思う。

みどりは怒らないだけでちゃんと悪い事は注意するが、もし好きなものを奪われたら怒るのだろうか？

普段の食事でも表情を変えないみどりが好きな物。

それは・・・

「ただいまー」

「お帰り巽。おやつあるわよ」

椅子に座ろうとしたら、すでにみどりがいた。

俺よりも早く帰るなんて珍しいと思ったが、今日は水曜日だから部

活は休みだったな。

「ただいま、みどり」

しかし返事どころか反応も無い。

まあ、みどりは元からそうだな、と思いながら座った。

テーブルに置かれていたのは、葉っぱに包まれたあのスイーツだった。

・・・いや、スイーツって言葉は雰囲気的にちょっと似合わないかな。

みどりは、柏餅を前にしてにこにここと微笑んでいた。

好きな物を前にしてとても嬉しそうにしている。

とは言っても他人が見たら多少口角の角度が吊り上がっている程度にしか見えないかもしれない。

この表情が笑顔だと認識出来るのは、きっと家族か親しい友達だけだろう。

「・・・・・・・・・・!!」

ようやく俺に気付いたのか、みどりは恥ずかしそうに口元を隠してしまった。

自分でも笑っているという自覚はあるらしい。

「お、お帰りなさい、お兄ちゃん」

「ただいま、みどり」

やっぱり女の子だから甘いものは好きだよな。

でもケーキじゃなくて和菓子ってところが、なんだかみどりらしい。

みどりはそそくさと葉っぱを剥がして、スプーンで柏餅をひとかけら掬った。

ゆっくりと口に運び、更にゆっくりと噛み締めている。

普段はただ食べ物を口に入れているという感じだけど、この時だけは違う。

「・・・・・・・・」

見るより食べる方が幸せだろうな。

今の表情は他人が見ても嬉しそうだと分かる。

食事は量じゃなくて質、というタイプだ。

見ているとこっちまで幸せな気分になっていく様な気がする。

うちの馬鹿なお姉様も少しくらいは見習ってほしいよな・・・まったく。

～～～続く～～～

### 3・黄児の夢（前書き）

兄弟の中で一番夢があるのは、おそらく黄児だ。

「世界中の国にあるプリン食べたい！」

だとか

「山より大きなコロッケ食べたい！」

だとか

「学校のプールいっぱいに入ってるラーメン食べたい！」

などと、必ず語尾にそれがおれの夢なんだ！と目をきらきら輝かせて言う。

夢を見るのは自由だから、実現出来るかどうかはさておきいかにも子供らしい可愛い夢だ。

「よしよし、お前は純粹だな黄児いゝ」

皆に可愛がられる体質の黄児だが、特に姉ちゃんに気に入られている。

大きなお腹を撫でるのが好きらしく、抱きよせながらいつも手でタプタプしていた。

普通、太っている子供は体に触られるのを嫌がるものだけど、黄児は姉ちゃんにだけは許しているらしい。

「もしあかねえが悪い奴にさらわれたらおれが助けるからな」

「おお、そうか。それは嬉しいね」

「悪い奴からみんなを守りたい。それがおれの夢なんだ！」

「無理だな。黄児」

「なんでだよたつにい！おれは愛と平和を守るヒーローなんだぞ！」

「だって・・・お前の隣にいる奴はとびっきりの悪党だぜ。人の食



い物を盗む、世界一の悪党だ」

「なんだって?!あかねえは悪い奴だったのか?!」

「これこれ巽君、未来のヒーローに何を吹き込んでいるのかね」

「覚悟しろ!くらえ、タカ!トラ!バツ・・・うわっ!」

興奮してテーブルに上がり、必殺技を繰り出そうとした黄児が勢い余って落ちた。

「おい、大丈夫か?」

「こ、転んでもいいよ、また立ち上がればいい。ただそれだけでできれば、英雄さ!」

ヒーロー番組の主題歌の歌詞らしき言葉を口ずさみながら、起き上がった。

偉いぞ、痛いだろうに決してそれを見せようとしないんだからな。

「あんたより打たれ強いかもね、巽」

「うるさいよ怪盗ルパン」

「覚悟しろー!」

まだ立ち向かってくる黄児を宥めながら、姉ちゃんは笑っていた。日曜日の朝、起きてきたら珍しく姉ちゃんがもうリビングにいた。どうい風風の吹き回しなのかと思ったら、黄児と格闘ゲームで対戦している。

「ちょ、ちょっとあかねえ、強いって!やりすぎだよ、うわわわわわ!」

黄児の操る力士が、姉ちゃんの操る紅頭巾の女の子に芳でザクザク切り刻まれていた。

はは・・・日曜の朝からこういうスプラッタなものは刺激が強いよな・・・

それにしても、少しは手加減してやれよ。大人のくせして本当にろくなもんじゃねえな、姉ちゃんは。

「どうした黄児。お前の力はその程度か？」

「ずるいぞあかねえ！おれ、このゲームやった事ほとんど無いのに！」

「こら、師匠と呼べと言ったはずだぞ！修行したいと頭を下げたのは誰だ！」

「うつ・・・そ、それは・・・でもさ、ゲームやってて修行になるの？」

「当たり前さ。凡人にとっては遊びであっても、達人には修行になるのだ」

相変わらず胡散臭い姉上様ですわね。

まあ姉ちゃんの真意なんて知ったことじゃないが、歳の離れた弟と遊んでやるなんて面倒見のいいところもあるのだ。

あまり離れてない俺は散々な扱いだけど・・・

「どうだ黄児、まだ続けるのか？」

「他のゲームしようよ。おれもう飽きた」

「ふん、そうか。所詮お前のヒーローになりたいという夢はその程度だったんだな」

「なんだとー！！もう一回、いや勝つまで続けるぞー！！」

「そうだ、その心構えは大切だな」

気合いを入れ直して再び姉ちゃんに挑む黄児。

その甲斐あってか最初から姉ちゃんの操るキャラを手数で押していく。

「へえ、多少は手応えが出てきたな」

「絶対に負けないぞ！おれはヒーローになるんだ！」

・・・あんなにひた向きに頑張れるのが羨ましい。

俺には何かあるのだろうか？誰にも譲れない、いわば芯となる様な物を持っているのか？

「あららら、ねえ黄児？カツ丼おごってあげるから手加減してほし  
いなあ」

・・・なんという情けない姉上様だ。

あいつはもう人間じゃない、虫だ。

ああはならない様にしよう。

姉ちゃんをボコボコにして気を良くしたのか、黄児は外でトレーニングしたいとジャージに着替えた。

寒いのに良くやるな。

「頑張るな、黄児」

「うん！やっぱヒーローなら強くななくちゃ！走ってくるね！」

「待ってくれ、俺も行きたい」

「ホント？分かった、一緒に走ろうたつにいい！」

たまには弟の面倒を見てやるのも悪くない。

黄児といると正直疲れるんだけど、その分元気を貰えたりするからな。

掛けてあったお気に入りの黒いジャージに着替えて、黄児と共に家を飛び出した。

俺とは違って夜中でも目立ちそうな、自分の名前と同じ黄色いジャージを着ている黄児。

名前も性格も明るければ好きな色も明るい、それが俺の弟だ。

「1、2、3、4っ！」

一歩ずつ走る毎にカウントしている。

太ってるのになかなかフットワークが軽いので、他人が外見だけで判断すると痛い目に遭うだろうな。

世の中には動けるデブもいるとどこかの有名人が言ってたが、黄児は典型的なそのタイプに間違いない。

「・・・・・・・・！！」

急に振り返り、来た道を戻り始めた。

忘れ物かと思ったが家までは戻らず、全く違うコースを走っていく。

「どうしたんだ黄児、いきなり道を変えるなんて」

「嫌なんだよ・・・あっちの家、いつも通ると犬が吠えるんだ」

「ふうん、だから急にUターンしたわけか」

「わ、笑うなよたつにい！ヒーローにだって怖いものはあるんだぞ！」

そりゃあ、そうだな。

完璧な人間なんてもしいるなら見てみたいよ。

誰しも必ず欠点や怖いものはあるんだ。

姉ちゃんは容姿はそこそこだと思うけどあの弟を何とも思わない残念な性格。

兄貴は普段は冷静だけど酒癖が悪いところ。

俺は、良くも悪くも色々と無難だと母さんに言われた。

みどりは、感情があまり表に出ないところかな。

「でももしその犬が悪い奴らに襲われてたらどうする？」  
「ちゃんと助けて、でも怖いから逃げるよ」

・・・頑張れ黄児。ヒーローになれるその日まで。

くく 続くくく

### 3・黄児の夢

#### 人物紹介

進藤紅音<sup>あかね</sup>：22歳O型。長女。ラーメン屋の店員。物事を細かく考  
えるのが苦手。

進藤蒼太<sup>そうた</sup>：21歳大2A型。長男。穏やかで几帳面。酒に弱い。

進藤巽<sup>たつみ</sup>：17歳高2B型。次男。一応本作品の主人公。上と下に挟  
まれ気苦労が絶えない。

進藤みどり：16歳高1AB型。次女。口数が少なく心配性。

進藤黄児<sup>こへい</sup>：10歳小4O型。三男。脳天気で考えるのが苦手。食べ  
ることが大好き。

進藤銀太郎<sup>ぎんたろう</sup>：48歳AB型。進藤家五人兄弟の父親にして柱。小説  
家で書斎に籠もっているので、出番はそれなり。

進藤輝子<sup>てるこ</sup>：46歳B型。進藤家五人兄弟の母親にしてもう一本の柱。  
お喋りするのが好き。

#### 4・蒼太の変貌

兄貴はとにかくよく周囲を見ている。

「あら？お砂糖どこかしら」

「はい、母さん」

料理の途中調味料をどこに置いたのか分からなくなった母さんを、さり気なくフォローしたり

「あれ？！私の携帯どこ？誰か知らない？！」

「姉さんがさっき自分でテーブルに置いてたよ」

「あ、あははは、そっかそっか、トイレに入る前に置いたんだっけ」

まだ二十代の入り口で既にボケが始まっている姉ちゃんに優しく対処したり

「蒼太兄さん、この問題なんだけど・・・」

「うん、これは2つの方程式を使えば解けるな」

分からない問題を聞きに来たみどりに、分かりやすくて的確に教えたり、俺から見たら頼りになる人物だ。

モデルみたいな整った顔立ちに細身の体型で、好きな青い色のシャツを見事に着こなしてしまう。

そして誰に対しても優しく穏やかな口調で話すので、兄貴と接して嫌な印象を持つ様な奴はまずいない。

まさに理想の兄貴だ。

こんな立派な身内がいるのは素晴らしい事だと思う。

しかし、あくまで素晴らしいのは進藤蒼太自身であり、別に俺の評価には繋がらないと考えると、虚しいものだ。

そんな卑屈にならなくてもいいか、はは・・・

「今日も寒いなあ・・・参っちゃうね」

細長い指や美しい手を擦り合わせるその仕草・・・

もし、もしも俺が女の子だったとしたら、巽ではなく立美ちゃんだったとしたら、もう萌え死んでいたに違いない。

いやいや、違いますよ。僕はれっきとした健全な男の子です。

夏服の透けるブラに興奮してしまうピュアな高校2年生なんですから。

勘違いしないでいただきたいであります！

だが、神様というのは悪戯が大好きな人だ。

それも、子供よりもずっと残酷な悪戯を好む。

容姿端麗、文武両道な兄貴にも欠点を作ってしまったのだ。

以前ちよこつと触れたかと思うが、完璧な人間というのはこの世に存在しない。

でも、さあ・・・これは酷いだろ、なあ神様よお？あ？ああん？

「おう、蒼太。付き合つか」

「うん。いいよ姉さん」

食後のこの会話で俺を含めた全員が凍り付いた。

お願いだ姉ちゃん、やめて。ホントに止めてください！



姉ちゃんは家族の思いをよそに冷蔵庫から焼酎を取り出し、勢い良くテーブルに置いた。

ああ、ダメ。兄貴のグラスに注がないで、お願いだから。

しかし兄貴は躊躇う事もなくそれを傾けた -

瞬時に動きが止まり、目が座る。あああ・・・もう俺の知っている優しい兄貴はいないんだあ。

「ケツケツケツケツ、いい気分だぞお」

兄貴は下戸なのだ。

おまけに酒癖が悪く、普段の優しい人格が眠りについてしまう。

代わりにとんでもない人格が目覚めるのだが、それは飲む度に変わる。家族である俺達ですら、直前までどうなるか分からない。

今日は多分、良く笑いそうな感じだな。

姉ちゃんはそれが楽しいらしく、わざと酒を飲ませる。

なっ？クズだろこいつ。こういうマネして、何が楽しいんだろうな？

俺達は柱の影から様子を伺っていた。

触れたら火傷じゃ済まない。遠くから見守るに限る。

「おい姉さん、何か面白い話は無いのか？」

「あるよ。布団がふつとんだ、なーんつってあひゃひゃひゃひゃひゃ」

すでに姉ちゃんも出来上がっている。

だが、兄貴はそれ以上に目が据わっていたのだ。

「何がおかしい？」

「おかしいでしょ、あひゃひゃひゃひゃ。布団がふつとんだんだよばーんって！」

「何がおかしいのかと聞いている！幼稚すぎるんだよお前って奴は！」

「なんだとおゝ蒼太あゝ。姉さんのギャグがつまらんだとおゝ」

笑っていた姉ちゃんも目が据わっている。

今すぐに焼酎のビンを割って凶器にしまいそうな程、極悪な顔をしていた。

2人とも会社やサークルで飲み会に誘われなくなったとぼやいてたが、これでは仕方ない。

家族ですら近寄りたくないのに、同僚や友達なら尚更だろうな。頼むからせめて楽しいお酒にしてくれよ・・・笑うのが一番だぜ、何にしてもな。

「・・・！」

その時、テーブルの携帯が鳴った。

あれは俺のだ。回避を優先してて、肝心な物を持つてくるのを忘れてた。

ほっとけばいいのかもしれないが、俺の周りは電話に出ないという行為を嫌がるやつが多い。

嫌だ、友達を失いたくない・・・っ！

俺は意を決してリビングに向かう事にした。

「お兄ちゃん・・・」

「大丈夫さ、みどり。必ず生きて帰る」

「お墓に好きなコーラかけてあげるね」

「巽、毎日メンチカツお供えするから」

「たつにい、俺もちゃんとお参りするから！」

・・・なんで生きて帰れないのが前提なの？

そりゃ目の前は龍と虎が睨み合ってて、飛び込む俺はウサギみたいなものだが。

いやいや気配を消せば問題ない。ほら、俺は石です。路傍の石ですよ。

携帯はまだ鳴り続けている。間に合う、間に合う・・・間に合え！

「巽」

姉ちゃんのドスの利いた声に震え上がり、足が竦んだ。手を伸ばせばそこに携帯があるのに全く身動き出来なくなった。

酒が悪いんだ。

ついでに言うなら姉ちゃんがもっと悪い。

「なに？」

「呼んだだけ」

そついうと姉ちゃんは笑い転げた。

椅子から落ちても腹を抱えて笑っている。

・・・よく分からんが助かったのか？

さっさと携帯を取って逃げよう。長居は無用だ。

「巽」

しかし、もう一匹の猛獣が優しく声をかけてきた。

・・・ええい強行突破だ。一匹だけならなんとかなる！

「どこへ行くんだあ」

「うわあ  
ああ  
ああ  
ああ？！」

やめろ、抱き付くな！うわっ酒臭い、やめろ！

せっかく携帯を手にしたのにこれじゃ・・・！

まだ鳴り続けてる、こうなればこのまま出てやるぞ。

⌈  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
!  
!  
⌋

・  
・  
・  
切れた  
・  
・  
・

呼応するかの様に、俺の体から力が抜けていった。

もうどうでもいいや・・・

「おやすみ」

兄貴は抱きついたらままだ寝てしまった。

俺は酒なんか飲まない。

続

## 5・紅音の長所

人間、誰しも長所のひとつくらいはあるものだ。

光があれば影がある様に、欠点があれば長所もある。

・・・うちのお姉様を除いては、な。

ていうかこの人のいいところって何？真面目に聞きたい。

兄貴は人当たりが良く優しいところ、みどりは物静かで一緒にいると気を使わなくて済むところ

そして黄児は底無しの明るさがあって、見てると自然に癒されるところ・・・

母さんは料理が上手だし俺達兄弟の好みに合わせた完璧な味付けができる。

父さんはみどりに負けない位静かだが、人を笑わせるのが好きらしく少ない会話でも小ボケを挟むから話してて面白い。

でもこのク、いやいや素晴らしいお姉様にはいいところなんか何一つありはしないと思う。

ここ数日の行動を見ても朝っぱらから俺を階段から落とす、それから車でひくけど気付かない、

俺の大好きな食べ物を奪う、黄児にゲームで勝てないから食べ物で釣る、

そして酒に弱い兄貴を酔わせて楽しむ・・・

裁かれるべき悪業の数々、神様が許してもこの俺は許せない。

なんだか良く分からないが姉ちゃんはやたらと俺ばかり標的にする

のだ。

黄児は溺愛といってもいいくらい休みの日は可愛がってるし、俺と年が近いみどりも同じくらい遊んでいる。

兄貴は、たまに酒を飲ませたりするが基本的には仲が良い。

俺だけだよ……

なんでそうなの？ねえどうしてなの？

兄貴やみどり、黄児を車で跳ねないのはどうして？

いや、跳ねてほしい訳では無い。俺を跳ねないでほしいの。

俺、姉ちゃんになんかやったわけ？なあどうしてだ。

……面と向かって聞いたら楽だろうな。

聞いたらますます面白がって悪戯がエスカレートしそうだから、怖くて聞けない。

そうだよ、俺は弱虫だ。だから仕方ないじゃないか。

「……戻るか」

朝の散歩に出かけたがやつぱりもやもやする。

それに、寒い。12月だから当たり前だけど、真冬にはまだ早いのに。

今からこんなだったら本番はどうなってしまうんだ？

家に戻るともう8時だったが母さん以外は誰も起きてなかった。

軽く挨拶の会釈を済ませ、自分の部屋に戻る。

「最悪~~~~~!!」

そしたら人のベッドに寝てやんの、あいつが。

何してんのこの人？なんで自分の部屋で寝ないの？

やめてくれ……真冬なのにTシャツにパンツだけという、防寒も

へつたくれも無いスタイルで寝るのは。

「・・・・・・・・」

馬鹿姉は俺に気付き、顔を上げた。

瞼が微かに開きかけていたが、すぐにまた眠りに落ちる。

「邪魔すんなよ、寝たいからあっち行け」

「・・・・・・・・」

「無視すんな!!」

すると姉ちゃんは何んどくさそうに尻を持ち上げた。  
こ、この体勢は、やばい。今すぐに逃げなくては！

“ぶう~~~~~~~~、プスっ”

し……しまった……やられた……

しかも間延びしたくせに、歯切れが悪く最後に小さく途切れたのが  
余計にむかつく。

いやあ頭にくるね。返事をこういう形でされるってのは。  
まるでお前が出ていけと言わんばかりの行動だな。

うわぁこれは酷い。

毒ガスが俺の部屋に充満してるぞ。

「窓開けるなよ、寒いでしょ」

「嫌なら原因を作るな。この悪臭女」

「そりゃあんたでしょ。汗臭いわねこのベッド」

「だったら自分のところで寝ろ。早く出ていってくれ」

「疲れてんの……巽の部屋、日当たり良くてあったかいんだも

ん・・・」

暖を求めているのか。だったら厚着して寝ろ。

まったく、いつまで人の部屋に来るつもりなんだよ・・・

もう俺は高校生なんだし、普通の姉弟なら自然に壁が出来るはずだ。だが姉ちゃんはそのなお構い無しだ。

下手すれば未だに一緒に風呂に入ろうとするかもしれない。

仲が良いにこした事は無いが、多少の線引きみたいなのはなければおかしいよな。

とにかく、姉ちゃんといるとそれだけで疲れちゃう。

でも他のみんなはあまり嫌がる素振りは無いんだよね・・・  
やたらと家の中で姉ちゃんを家族に呼ばれる事が多い。

そっぴゃ、いつも誰かしらと一緒にいる事が多い様な・・・

「異い」

寝呆け眼で姉ちゃんは俺を呼んでいる。

なにをにやにやしてるんだ、キモチ悪い奴だな。

でも何故か、理由は無いんだけど近くに行きたくなって近付いた。  
やられたらやり返せる様に警戒していたが、あっさり捕まってしまう。

カメレオンか食虫植物に捕まるハエもこんな気分なのかな。

そのカメレオンか食虫植物は、間延びした屁をこくのだろうか？

「は、離せ！」

「ん~~~~、やっぱり異はあつたかい」

まるで抱き枕みたいに俺を締め上げる姉ちゃん。

あ、頭に血が昇ってる・・・苦しい・・・やめろ・・・！



「離せえ・・・姉ちゃん、やめろおお!!」

「いやだ。下手な布団や毛布よりあったかいんだもん」

何が哀しくて日曜日の朝からこんな目に遭わなくてはならないんだ？  
俺はいい歳した姉ちゃんに抱き付かれて喜ぶ趣味なんて無いぞ。

「ねえ、巽」

「・・・・・・・・・・」

息がかかる距離にある、姉ちゃんの顔。

寝起きだから当然化粧なんかしてないんだけど、肌は綺麗で眉毛も  
しっかり残っている。

「覚えてる？あんたがちっちゃい頃はよくこうしてたんだよ」

「いつの話だ・・・」

「覚えてないかー。そもそもウソだし」

「呼吸するみたいに出任せを言うな!」

「それも出任せ。さあ、どっちだろうねえ」・・・」

「おい、姉ちゃん?!」

・・・・・・・・・・また寝ちゃった。

おいおい、せめて腕はほどいてから寝ろよな。

そういう姉ちゃんの長所って結局なんだったんだろう・・・?

しいて言うなら不思議と周りに人が寄ってくるところ、だろうか。  
ん？なに、無理矢理まとめた感じがする？

ああ・・・聞こえない・・・

あーあー・・・聞きたくない・・・

なんだか眠くなってきたぞ。姉ちゃんの眠気が伝染したか。

いつもに比べたら今日の姉ちゃんはまだましな方だな。

じゃ、おやすみ。

くく続くくく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0460z/>

---

進藤家の人々

2011年12月5日19時50分発行